2013　北海道　旅ログ　その 3

3 日目
窓の外はやはり雨。
こんな中を最北端目指して走るのか？
答えは Yes。とにかく行くしかない。

外を眺めていて思った。信号機が縦長だ。雪対策なのだろうが、7 回目の北海道にして初めて気がついた。
10 時頃チェックアウト。
最北端目指して 12 号を走る予定だったが、どうにも道を間違えたらしい。適当なところでそれらしい方向へと右折する。高速の側を走り、やがて 12 号に合流した。私の山勘もまだまだ生きているようだ。
札幌は恐ろしく巨大で交通量も多く､都市圏を抜けるのに 3 時間ほどかかった。雨のせいもあるだろう。とにかくこんな進行速度は北海道では記憶がないくらい遅かった。ずっと雨に打たれたせいか、カッパの耐水性能を超えたようで、どんどん浸みてくる。途中、高架下を見つけ一休み。
通りの向こうに自動販売機があったので、缶コーヒーでも買おうと横断。すると、北海道限定というペットボトルのミルクコーヒーがあったので、迷わず購入。

ずっとこんな感じ

ミルク感たっぷりなのにさっぱりで、結構いける

昔の記憶とは程遠い、拡幅された 12 号をひたすら北上。
途中、左折して留萌に向かう。留萌から再び北上。稚内を目指す。
羽幌に着いたのは 17 時頃。
GS に寄って給油を済ませた時、悲劇はいきなりやってきた。

キーレスエントリーのメインスイッチが反応しない。
何度やっても近づけてもうんともすんとも言わない。その様子を店員さんも見ていて、「すみません、ちょっと対策を考えますから」というと、嫌な顔ひとつ見せず、こころよく「雨風のあたらないところでどうぞ」と言ってくれた。
バイクを移動し、メカニカルキーを使ってトランクを開け、中にある取説を見てもトラブルシュートはなく、考えられる原因を一つ一つ整理した。中でも最も軽いものとして、送信機の電池切れがある。先ずはそれを試そうと思った。
記載された電池は CR2032。これなら、どこのコンビニにもある。近くのコンビニの場所を店員さんに尋ねると、ちょっと遠いからと、親切に車で送ってくれた。電池を買って GS に戻り、工具を借りて送信機を開け、交換した。基板がいってないかを確認するように送信機のスイッチを押して、入る、切るのランプ点灯を確認。OK だ。実車で試す。
これでダメならバイク本体の基板が大雨で浸水して壊れた可能性があり、そうなったらもうお手上げだ。
祈るような気持ちでメインスイッチを押下する。

お世話になった GS

反応があった。
やった、成功だ。
一緒になって喜んでくれた店員さんにお礼を言って、下ろしていた荷物を再び積み込もうとした瞬間。再び心臓が凍りそうなモノを見てしまった。
さっき電池を替えた送信機の内部基板が、荷物の上に落ちていた。
送信機のがわたんは、確かに今、手に持っている。
私は目を疑った。

ふたたび工具を借りて送信機に組み付ける。
きちんと組み付けていなかったから、こんな目に遭う。
せっかく成功したのに、これで破損していたら、アウトだ。
とにかく今度は慎重に組み付けて再びテスト。
反応した。
壊れていなかった。助かった。
コンクリートの上でなく、荷物の上に落下したから救いがあったのだろう。運命の神様はそこまで意地悪ではなかった。
重ね重ね店員さんにお礼を言って、再び走り始めた。すると道の向こうに夕焼けが見えた。女性の店員さんが「自慢です」と言っていた通りにダイナミックで美しい夕焼けだった。

羽幌の美しい夕日

見知らぬ土地で、雨風にさらされつつ夕闇迫る中、GS スタッフの皆さんの親切にはほんとうに助けられた。ありがとうございました。

4 日目

士別の町で、重大な決断をした。

天気は晴れ。本来ならば最北端目指してごきげんなツーリングとなっても良さそうなのに、行くことを断念せざるを得ない。

そう、風が強すぎる。

風速 10m。

スクーターは後ろ半分に重量が集中していて前は軽い。おまけにでっかいスクリーンやらカウルやらで、風が吹けば前輪が持って行かれる。町のコンビニで 1 時間くらい悩んだ末に「よし、行ってやる」と思って走り始めたところ、2k と走れず諦めた。そうなったら、もう開き直って温泉旅館にでも泊まってのんびりしよう。そう思って層雲峡の旅館に予約を入れた。

和寒の道の駅で

層雲峡の温泉街

源泉掛け流しの宿に早めに入った。
先ずは風呂だ–！
確か単純泉だと思うが、私の好きな「やわらかい湯」だ。
天井が敷地いっぱいにかかっているため、露天といえるかどうかかなり微妙な露天風呂につかる。天井の隙間から見える木々の緑が強風にあおられせわしなく揺れている。その風は、旅館の夕飯のにおいを運んできた。どっぷりと湯につかり、木々のざわめきに耳を傾け、今夜の飯に思いをはせるなんて、なんて幸せなんだ。いつまでもこうしていたいと思い、小一時間ほど湯船につかっていた。
この宿は一泊 2 食で 7800 円だった。リーズナブルな価格だからというのもあるが、層雲峡温泉には実は思い入れがある。「夏の陽に」で描写しているが、28 年前のあの旅で、夕暮れ時にここを訪れた。渓流沿いに立ち並ぶ高級そうな旅館を見て、もちろん当時はそんなところに泊まるようなお金はなかったし、あの時も夕飯のにおいが流れてきていて、「いつかは泊まりたいなあ」と思ったものだった。それがひょんなことから実現してしまった。

で、待ちに待った夕飯がこれだ↓↓↓（28 年も待ったことになるかも）

ちょっとしたバイキングに飲み放題がついている。
お腹いっぱい幸せ気分で、その晩は早めに寝た。

その３終わり。その４へ続く